

「モチをつくるDNAは、4400個の塩基で形成されていることが知られています。配列も分かっています。だからDNAを調べれば、もしトランスポゾンだとすれば、分子レベルで何が起きているかが解明されます」

佐藤さんの今後の研究は**新たな遺伝学の地平を開く可能性**があります。

また、トランスポゾンなら、モチからふたたびウルチに戻るものもあるはず。ウルチに戻る確率が高いと分かれば、トランスポゾンの可能性はより高まります。



もしイセヒカリがトランスポゾンだとすれば、生きたままの状態で見られるのは、佐藤さんによると、栽培植物ではきわめてまれで、学問的には画期的な発見になります。

「従来のトランスポゾンは機能を失った、化石状態で研究されてきました。しかし、イセヒカリのトランスポゾンは生きています。

研究に弾みをつけることになります」

佐藤氏は早くも若いトランスポゾン研究の専門家たちとチームを組み、本格的な研究の準備を進めています。その出発点が、10月上旬、九州大学で開かれた**日本育種学会**で、佐藤さんはイセヒカリのトランスポゾンの可能性をはじめて発表します。

「学会での発表後、世界中の遺伝学者がザワッと動きますよ。トランスポゾンなら日本政府は私たちの研究を財政的に支援してくれるはず。それだけ大きな価値があるということです。もしトランスポゾンでないとすれば、もっと面白い。さらに大きな新発見につながるかも知れません」

もしかして**ノーベル賞級の発見**かも――佐藤氏の目が眼鏡の奥できらりと光りました。

追伸 この記事は、宗教専門紙「**神社新報**」平成13年10月8日号に掲載された拙文「**ひとは何を信じてきたのか 22 新発見イセヒカリの遺伝形質――トランスポゾンの可能性高まる**」に、若干の修正を加えたものです。

記事に出てくる育種学会は去る10月に開かれました。参加者によると、発表会場には立錫の余地もないほど、たくさんの方々が詰めかけたそうです。(平成13年11月)

ShuzouArakaki@海洋深層水調合液トンネルフォトン水60dbで見る眠れる遺伝子の再生のデーター



トンネルフォトン水60dbを醤油たれ瓶に充填して木につりさげました。
およそ3か月で空になります



ハイビスカスは最初小さく一輪咲き、しかもある時期（夏の間）に咲きます。
深層水散布2か月目ぐらいから大きな八重咲きに変化しました。葉っぱも大きく緑豊かになりました
八重咲きは周年咲いています



一年後の5月ごろ同じ枝から一輪咲きと八重咲きの2種類が同時に咲きました

この現象は毎年5月ごろと11月ごろに見られます。おそらく気温や日照時間で遺伝子の目覚めがあるのではないかと示唆します。

深層水を散布しないとこの現象は起きないのでおそらく眠れる遺伝子の目覚めは深層水が活躍しているものと考えます



ホテイアオイにトンネルフォトン水利用した場合

未使用は葉は小さく花は乱れ手咲きました

トンネルフォトン水散布した場合

葉は大きく、多数の花が整列して咲き誇り美しさを醸し出しました



珊瑚礁復興の場合、セットして2か月後からあ
たかも珊瑚を占拠するように藻が繁殖します。
しかしこれは生命体の共生サイクルであり、夏
の強い日差しから珊瑚を守ります。
藻は7月に孵化した稚魚のえさとなり、珊瑚は
姿を現します、そのご8月に入ると珊瑚は熟成
した卵を抱えており夏の夜に産卵します。



カニ類は死ぬとすぐに消化酵素で身を溶かしま
す
しかし、トンネルフォトン水を散布すると、身
や色合いは維持され黒ずみやアンモニア臭など
の劣化も抑制され品質管理に適します



トンネルフォトン水を吸収したバナナに木は
大きく育ち、通常の数倍の身を付けました
トンネルフォトン水は農業利用で増生産に利
用されており大きく早く収穫できる特徴があ
ります



深層水添加氷冷蔵で持ち帰ったソデイカのお
頭（釣り上げて切り離され数日経過）は調理時
でも生きていました。
これはトンネルフォトン水開発で最初に利用
された魚介類鮮度維持延長技術です



鮮度維持延長技術は長距離生鮮輸送に応用されました
写真は小笠原父島→沖縄南城市長距離生鮮輸送の記録写真で
す。
経過時間
釣り上げて持ち帰り→週一の船便まで保管→東京輸送27時
間船便→東京で荷受け空輸のため羽田へ→翌日沖縄那覇空港
着→中央集荷場へ移動→南城市集荷場へ移動→宅配にて到着